

# 寝屋子とある島

## －女性寝屋親からみた寝屋子慣習－

人文社会科学研究科 地域文化論

112M205

林 拓斗

## 目次

序	1
1 章 寝屋子慣習の実態と変遷	2
2 章 寝屋子慣習をどうみるか	6
3 章 女性寝屋親にとっての寝屋子慣習	10
終章	23
参考文献	24

## 序

三重県鳥羽市、答志島の答志地区には、中学校を卒業した男子で主に長男が、家族とは異なる家で、25、26歳頃まで同級生数人と共に寝る、寝屋子という慣習が残っている。厳密には寝屋で寝る子どもたちを「寝屋子」、寝に行く家を「寝屋」、寝屋の夫婦を「寝屋親」と呼称されるが、合わせて「寝屋子」「寝屋子制度」「寝屋制度」などと呼ばれている。ただ、制度というほど厳密なものではなく、慣習とあらわす方が近いであろう。

さて、寝屋子に関連する研究は多数あるが、寝屋子という風習の特徴からか、既存のほぼ全ての調査、研究が男性の寝屋親と寝屋子を対象として行われており、女性の寝屋親を対象とした例は皆無であった。

しかし、答志の住民が「寝屋子を組む」とき、そこには寝屋親が存在し、寝屋親は例外なく夫婦である。寝屋親が夫婦という単位である以上、男性の寝屋親のみの力で成立するものではなく、女性の寝屋親の協力は必要不可欠である。

そこで、今まで焦点を合わせられることがなかった、女性の寝屋親という立場に注目することで、寝屋子という慣習の新たな一面の発見が期待できる。

## 調査について

調査方法はインタビュー形式を取った。対象者1名、または、寝屋親夫妻2名に対して、いくつかの基本の質問事項に答えてもらいつつ、横道に逸れた場合は状況によって質問を追加、修正し、対話を重ねていく形式を取った。なお、基本の質問事項は後述する。

調査対象者は、現在進行形で寝屋親を経験しているか、以前寝屋親を経験したことがある者とし、初回以降は次に調査する寝屋親を紹介してもらおうという形で進めた。

## 1章 寝屋子慣習の実態と変遷

## 1. 寝屋子慣習の概要

序でも書いたが、寝屋子慣習の中では、寝屋で寝る子どもたちを「寝屋子」、寝に行く家を「寝屋」、寝屋の夫婦を「寝屋親」と呼称される。

寝屋で寝る寝屋子たちは、実家で夕食を食べた後寝屋に集まり、朝食は実家に帰って取り、基本的に寝屋親の元で食事をするのではない。

寝屋子が結成されることを、答志では「寝屋子を組む」という言い方をするのだが、寝屋子が組まれるまでの大まかな流れは、どの寝屋子においてもほぼ共通しており、以下のような流れを辿っている。

まず、寝屋子に入る子供たちの親が集まり、誰に寝屋親を頼むかを決める。この際寝屋親を打診される人物の条件は、夫婦であることと、寝屋子を泊まらせることができる部屋があることその他、人柄も加味されるが、夫婦以外の家族構成は特に重視されない。もっとも、寝屋子に入る子どもの親が頼みやすい人物の中から、先の条件を満たす夫婦に寝屋親を依頼する傾向が強いようである。

次に、実の親たちが、寝屋親の引き受け手に依頼するのだが、これ以前に既に日常会話に出ているなど、前もって根回しがされている場合がほとんどで、最終的にはほぼ必ず寝屋親を引き受けてもらえる人物に依頼されている。

最後に、寝屋親を依頼された人物が寝屋親を引き受けると、寝屋親は寝屋子たちが泊まる部屋を用意し、寝屋子たちは実家で用意した布団一式を寝屋に持って行くというのが規定された路線といっている。

また、布団の持ち込みとほぼ同時に、顔合わせという形で食事をするになっている。ただし、その内容は寝屋子毎にまちまちであり、寝屋親と親たちだけが飲食店で。寝屋親と寝屋子たちのみが寝屋親の家で。寝屋親と寝屋子たち、寝屋子たちの実の親たち全てが寝屋親の家で。という具合に、寝屋親が参加するという以外の共通点は特にない。

ここまでの寝屋子が組まれるまでの流れである。これから約10年程寝屋子が続いた後、寝屋子のうちの誰かが結婚するか、あるいは、青年団入団と同時に寝屋子は解散となる。しかし、解散すると寝屋子同士の関係がなくなるということではなく、解散と同時に寝屋子たちは寝屋子毎に朋友会という集まりを結成する。この朋友会の構成員は朋輩と呼ばれ、一生の長きに渡って強い付き合いを続けていくこととなる。

寝屋子解散後にできあがる朋輩以外にも、冠婚葬祭は寝屋子慣習によって形成される人間関係が大きく関わっている。例えば、寝屋子の生家の冠婚葬祭には寝屋親も主催者側として協力することが一般的である。また、寝屋子解散後も、朋輩や、朋輩の生家の親族に起きた冠婚葬祭は朋輩たちによって取り仕切られることも一般的である。

その他、今回の調査で質問したところ、寝屋子を結成したときに、先輩に当た

る寝屋子を手本にするということは無く、場合によっては参考程度にすることはあるが、基本は寝屋子毎に独自の「寝屋子の色」があるという返答が返ってきた。どちらかというと、他の寝屋子をみながら、それ以上の寝屋子を目指すという様式が確立されていると考えて良いだろう。

## 2. 寝屋子慣習の変遷

元来、寝屋子たちは夜それぞれの実家で夕食を取った後寝屋に集まり、朝起きるとそれぞれの実家に帰って朝食を取るというものであった。しかし、40 年程前と 20 年程前に大きく変化している。

この、寝屋子慣習の変化は、高校進学率の上昇と、その後の進路選択の多様化、および、少子化などの要因が混合されて少なくない影響を与えた結果であると考えざるを得ない。

寝屋子慣習の主立った変化は、①寝屋子が寝屋に集まる頻度、②寝屋子の構成員の変化、③寝屋子の解散時期、が挙げられる。

ひとつめの「寝屋子が寝屋に集まる頻度」は 40 年前はほぼ毎夜だったのが、20 年程前には毎週末になり、最近では長期休暇のみ、あるいは集まっても寝ない寝屋子が大半を占めるようになってきている。中でも特に顕著なのが、高等学校進学率の上昇が如実に表れた 20 年程前である。それまでは、寝屋子の構成員と、中学校を卒業したら答志で漁師になるか家業を継ぐ者が一致していた。しかし、中学校を卒業して高等学校に進学すると、島外の、鳥羽市や伊勢市、津市などの高等学校に進学することとなる。鳥羽市以外の高等学校ではもちろんのこと、鳥羽市の高等学校の場合でも体育系の部活動をしていると、定期船の最終便に間に合わず、下宿せざるを得ないのである。当然、答志に帰ることができるのは週末のみとなり、その結果、寝屋に集まる頻度が毎週末となったのである。

ふたつめの「寝屋子の構成員の変化」、こちらの大きな変化も 20 年程前に起こっている。40 年以上前は、寝屋子のほとんどは、中学校の卒業と同時に漁師になる者であった。その他、旅館業や飲食業などの家業を継ぐなどして島に残る者も含まれていた。つまり、多くの寝屋子、ほぼ全てと言っても過言ではない寝屋子が長男であった。それが、20 年程前からは高等学校に進学する者や、長男であっても島外に出て行く者、また、次三男でも、希望する者は寝屋子に入るようになった。

最近では、大学進学後に関西や名古屋、東京に就職していく寝屋子たちも少なくなっている。さらに、長男であっても寝屋子に入ることを希望しない者がでるなど、「中学校を卒業した長男は寝屋子に入る」ことが当たり前のことではなくなりつつあるようである。

最後の「寝屋子の解散時期」は、現在は 27 歳になる年となっているが、こちらも若干の変化がある。40 年程前は寝屋子の誰かが結婚したら解散というものだった。これは、25 歳になる頃には誰かが結婚していたためであるが、20 年程前には

結婚した者から離脱していき、25、26歳になる頃に解散。最近は結婚しなくても27歳頃になると解散するようになっていく。解散年齢が徐々に上がっているのは、青年団への入団と寝屋子の解散が同時だったのであるが、少子化のために青年団入団の年齢が現在の27歳に上がったためである。

表1 寝屋子慣習の変遷

	集合頻度	寝屋子の内訳	解散時期
40年前	毎夜	漁師、あるいは家業を継ぐもので、長男がほとんど	寝屋子の誰かが結婚したら（25歳になる頃までには誰かが結婚していたためと思われる）
20年前	毎週末のみの寝屋子が出現	次三男および、島外に出て行く男子でも、希望する者であれば入れる	結婚すると離脱 結婚しなければ25、26歳になる頃
最近	長期休暇のみ、あるいは集まっても寝ない寝屋子が大半	長男でも寝屋子に入ることを希望しない者の出現（寝屋子に入るのが当たり前ではなくなりつつあるようである）	結婚すると離脱 結婚しなくても27歳になる頃

### 3. 寝屋子の起源

寝屋子の起源は諸説あり、一説によれば、九鬼嘉隆が船の漕ぎ手を集めるために推奨したとも、災害時や海難事故の対策のためともいわれている。寝屋には数人から十数人の若者が集まっているため、数件の寝屋を回るだけで大人数の若者を容易に集めることが可能であるからというのである。また、若衆宿が起源ではないかともいわれており、実際は、寝屋子の起源は定かではないというのが定説である。

しかし、現地で聞いた話の中に、少々気になる証言があった。インタビューを元に構成してみる。

昔は、若い男たちは夜になると、アネラ遊びということをしていた。言うなれば、年頃の娘がいる家へ遊びに出かけるのである。答志でも、寝屋子で連れ合って、女の子のいる家に行っていた。するとそこで、その女の子の父親や家族とコミュニケーションを取ることになる。

寝屋子の男たちが連れ立って娘の家に行き、声を掛ける。大抵は、居間にいる父親や母親に相對することになる。雨が降っていたりすると「えらい天気やなあ」と言ったり、「もうしもたかのー」と、夕食の後片付けが終わっているか問うたりした後、「あそぼってたんもいやー」（遊ばせてください）などと言うのである。

娘の親に気に入られると「2階におろど、上がっていけや」などと言われ、家に上がることを赦される。逆に気に入られないと、「おらへん」「まだ飯くとー」などと言われて追い返される。

娘の親に気に入られた場合は、娘の親と10分くらい話してから上がっていくといったような流れで、男たちは娘の家に上がっていった。

ところが、現在では状況が変化している。

寝屋子が友人を寝屋に呼ぶことは以前からあったが、最近では、以前は来ることはなかった女の子が来るようになった。特に、島外の友人から見ると、寝屋子という慣習は、ものすごく珍しいと思われているのであろう。男女交際の一面を見せているようにみえる。

しかし、女の子が寝屋子に遊びに来るというのは、寝屋子が消滅する前兆ではないかと考える住民も存在している。なぜかという、寝屋子という慣習は昔からその逆、女が寝屋に遊びに来るのではなく、男が女の家遊びに行くというものであったのであるからである。和具や桃取に存在していた寝屋子でも、寝屋子が消滅する間際には、女の子が寝屋子に遊びに来るようになっていたと住民は言っている。

答志の住民のこの証言を鑑みるに、寝屋子たちが娘の家に遊びに行くということと、寝屋子慣習の存続に切り離すことができない関係があると考えられよう。

九鬼嘉隆が船の漕ぎ手を集めるために推奨したという説や、災害時や海難事故の対策のためだったとされるよりも、若衆宿が起源であるとした方が自然である。さらに、時代が変わって、水軍が不必要になってなお寝屋子慣習が存在したのは、寝屋子慣習に男女の出会いの幫助という側面があったからではないだろうか。宮前は寝屋子慣習と婚姻相手の斡旋が切り離せない指摘しているし、また、和具や桃取の寝屋子が消滅する間際には、女の子が寝屋子に遊びに来るようになっていたという証言もある。ここから推察すると、寝屋子慣習の源流は、若い男たちがアネラ遊びに出かける前に集まる場、アネラ遊びの後に戻ってきて寝る場の提供と考えることができる。で、あるならば、九鬼嘉隆は元からあったそれを利用するために推奨しただけであるといえるし、災害や海難事故の対策のためというのも、寝屋に若い男たちが毎夜集まっていたという状況を有効に活用できた事例が蓄積されていっただけであると考えられることもできる。

## 2章 寝屋子慣習をどうみるか

## 1. 先行研究にみる寝屋子慣習

### (1) 寝屋子“制度”の誕生

宮前耕史は、寝宿慣行は民俗学で言うところの若者組とは照応関係を見出だされたことにより、寝宿慣行は寝屋制度と呼ばれることになった。(中略)戦後、昭和30年代になり、「寝屋制度」あるいは「寝屋子制度」と言及・呼称されるようになると、以降、この「寝屋制度」という概念は、地区住民と、学界や政界、マスコミ等といった外部社会との間における相互作用を通じて、地区住民の間に普及し、答志の寝宿慣行を固有名詞として定着していった。現在では、この「寝屋制度」という概念は、整備された一定の定型的言説を内容としながら、地区住民が外部社会に対して寝宿慣行を説明する際の、いわば「正式名称」「公的呼称」として用いられている。(「「寝宿制度」の誕生―鳥羽市答志の寝宿慣行をめぐる「民族再帰的状况」の成立―」pp.23 より要約)と、今日、寝屋子慣習を「寝屋子制度」または「寝屋制度」と呼称するに到った経緯を示している。行政、学界、マスコミ等が「寝屋子制度」「寝屋制度」と呼ぶことにより、権威付けられた呼称として定着したというのである。

### (2) 人間関係を寝屋子に求める

また、宮前は、寝宿慣行の中心的存在は、寝る場所の提供ではなくなりつつあり、宿親―宿子という人間関係にこそ求めなければならないであろう。(「現代における宿親―宿子関係 ―鳥羽市答志の寝宿慣行を事例として―」pp.99 より要約)というように、寝宿慣習の中心的役割は人間関係構築の場の提供であるが、場所そのものの提供ではなく、寝屋子―寝屋親、寝屋子同士の人間関係の構築であると言及している。

さて、寝屋子慣習は制度であるとしたうえで、寝屋子慣習の本質は人間関係の構築であろうとする宮前に対し、横浜勇樹と上野利三は次のように反論している。

宮前は「寝屋子」が“制度”として外部から権威づけられたことにより、住民の「寝屋子」への意識を高くしたと考察している。しかし、筆者は「寝屋子」は“制度”ではないと考える。「寝屋親」が「寝屋子」を当番制でおこなっているわけでもないし、答志地区の住民の全家庭が「寝屋親」を引き受けなければならないという決まりもない。つまり自由なのである。どこから押しつけられることもない「寝屋子」は答志地区の住民にとって「居心地の良い組織」なのである。活動継続の秘訣は居心地の良い組織であるが、しかしその「居心地の良い組織」を継続させるには、日頃からの人間関係がしっかり成り立っていることが前提である。答志の住民にとって居心地の良いという「寝屋子」のあり方こそが、「寝屋子」がこれまで継続されてきた理由であり、今後も継続していくものと考ええる。(「三重県鳥羽市の「寝屋子」にみる持続可能なコミュニティ形成に関する研究」pp.122-123 より要約)



寝屋子慣習の存続の秘訣は、寝屋子慣習によって生成された人間関係がしっかり成り立っていることであるというのは、宮前が言及した寝屋子の本質とほぼ同じものであると考えて良いだろう。しかし一方で、寝屋子は制度ではなく、自由な組織、居心地の良い組織であると明言している。

これらとは明らかに異なる観点から寝屋子慣習に迫ったのが、新川泰弘と島崎良である。新川らは育児不安やストレスを強く感じていることと子育てへの協力およびサポート状況との関連性、また、南勢地域の地域子育て支援センター利用者の方が子どもを出生する前の準備状況が整っていることが指摘されているとしたうえで、子育てサロンの利用者へのインタビューを通して答志島の子育ち子育て支援環境と寝屋子制度の関係性を検討。島外出身の母親が増えることで、母親は島内で孤立し、子育てに関するコミュニケーションを行うことが難しいと考えられてきたが、実際は母親同士仲がいいことが挙げられていた。それは、父親が経験した寝屋子制度を通してできた友達、団結力を活かし、妻同士のネットワーク作りに貢献していることが考えられた。（「答志島の寝屋子制度と子育ち子育て支援環境－子育てサロン利用者へのインタビュー調査を通して－」pp.127-132 より要約）と、子育てという視点から、妻が夫の朋輩を通して、他の母親とのネットワークを作ることによって、子育てでの孤立を回避することが可能となりうると主張している。

寝屋子に関する研究の中で、唯一女性からみた寝屋子慣習という視点で、島外から嫁いできた女性が夫の朋輩を通じた人間関係を利用して、母親同士のネットワークを構築、その結果、島内で孤立することなく子育てを行うことができるのではないかとしている。この場合、女性は直接寝屋子慣習に関わっているわけではなく、あくまで、結婚前の夫が経験していた寝屋子慣習において培われていた夫の人間関係を上手く利用することができた結果なのであるが、寝屋子慣習という答志独特の環境を上手く取り込んだ子育てという、寝屋子慣習が持つ寝屋子－寝屋親関係以外の一面が示されている。

### （３）寝屋子研究の課題

また、松浦勲と大村恵子は、寝屋子が男性の寝屋親（親父）と実父に対してそれぞれどのような意識を持っているかを調査した論文の最後に、我々がやり残したことはあまりにも多い。と、四項の課題を挙げている。簡単にまとめると、①答志以外の寝屋子が消失した後、なぜ答志のみに寝屋子が残っているのか。②寝屋親の意識について触れていない。③女性たちが寝屋子制度にどのように関わっているのか。④寝屋子制度と学校教育、寝屋子制度と青年団との関係性について。となる。そして、これら四つを明らかにしないと、なぜ答志のみに寝屋子制度が存続し続けているのかが解明できないとしている。（「日本最後の若者宿－鳥羽市答志の寝屋子の研究」 pp.55 より要約）

### （４）寝屋子慣習に期待されるひとつの側面

宮前は、寝屋親会議の中での発言で、「女性の高校進学者が増加し就職先が

学校の斡旋によって決定されるようになると、盆になっても帰ってくることができなくなり、就職先で結婚相手を見つけるようになってしまった」「女性の生活パターンが変化したため、「嫁不足」という問題が発生してきた」「適齢期にある女性の姿が消えてしまったため「娘遊び」も消滅した」（「「寝屋制度」の誕生・序説―「寝屋制度について〈寝屋親会議の記録〉―答志」より」pp.79-82より要約）といった具合に、嫁不足と「娘遊び」の消滅が強調されたのは、婚姻の斡旋と「娘遊び」が寝屋制度の本質であるという認識が出席者たちの中に存在するためであると指摘している。

## 2. 先行研究から見出される寝屋子慣習と本稿取り上げる寝屋子慣習

さて、ここに挙げた論文以外でも寝屋子という慣習そのものについては大体同じようなことが書かれているが、寝屋子という慣習がどういったものなのかという以外に、ここに挙げた先行研究の中で重要だと思われるものがいくつかある。

ひとつは「寝屋子制度」という呼称ができた背景である。慣習である「寝屋子」が今現在は「寝屋子制度」と呼ばれるようになったのである。横浜らは制度ではないと主張しているように、私も狭義の意味では制度と呼ぶことは些か問題があると考えている。宮前も「制度」と書いているが2004年には“しきたり”とルビを振っているところからも、制度と言い切ることに違和感を覚えたのではないだろうか。しかし別の一面では、答志での調査の際、答志の住民は「寝屋子制度」と呼んでいるという一面を持っているため、あまり目くじらを立てる必要もないように思われる。宮前が指摘しているように、「寝屋子は制度である」というのが一般的な認識なのであろう。だからこそ、島外の者に話をする際、答志の住民は「寝屋子制度」と紹介するのではないだろうか。

なお、本稿では、インタビューと引用、要約を除いて寝屋子の扱いは「寝屋子慣習」に統一する。

ふたつめは寝屋子の中心的存在について、いうなれば、寝屋子慣習の本質である。宮前の指摘の通り、寝屋子慣習の本質が、答志の住民の認識では婚姻の斡旋というものであっても、結局のところ、寝屋子慣習が担っているのは人と人、この場合は寝屋子とその妻を引き合わせるということである。つまるところここでは、人間関係の構築という役割が、寝屋子に妻を斡旋することを期待するという形で表出しているのである。

また、新川も、夫の朋輩を通して知り合った他の母親とのネットワークが、子育ての場面で上手く作用していると指摘している。ここで重要な要素は、母親が利用するネットワークは、夫の朋輩を通して構築されているということであろう。つまり、この場合において形成されているネットワークは、寝屋子慣習が存在することが必要条件となっている。

これらから考えると、寝屋子慣習の本質は人間関係の構築であるといえよう。

最後は寝屋子研究における今後の課題とされるものである。①なぜ答志のみに寝屋子が残っているのか。②寝屋親の意識について。③女性たちにとっての寝屋子慣習。④寝屋子慣習と学校教育、寝屋子慣習と青年団との関係性。これら四項が挙げられている。

しかし、女性の寝屋親に注目することで、先行研究で取り上げられていないこれら四項のうちかなりの部分について解明できるのではないだろうか。

### 3. 寝屋子と寝屋親の位置づけ

寝屋子慣習の映像記録をはじめ、先行研究の中で取り上げられている聞き取り調査の中にも、「寝屋子は家族のようなもの」であるという内容の証言が散見されるのだが、論文の中でそれについて触れている例は見受けられなかった。

寝屋子と寝屋親の間には血縁があるわけではないため、血縁があることを「家族」の条件とするならば、寝屋子と寝屋親は家族ではないということになる。しかし、先に述べたように、「寝屋子は家族のようなもの」という趣旨の証言を放置したまま寝屋子慣習を議論することはできないだろう。

## 3 章 女性にとっての寝屋子慣習

## 1. 本論に入る前に

本章ではいよいよ女性にとって寝屋子慣習とはどのようなものなのか、女性の寝屋親にとって寝屋子慣習とはどういうものなのか、女性の寝屋親はどのような心境で寝屋子に向き合うのか、本稿では2人の女性の寝屋親からの聞き書きより探してみる。

序で、後述するとした基本質問事項は以下の8項である。なお、氏名、年齢、出身地は別である。

- (1) 寝屋親になる以前の、寝屋子慣習に対しての印象
- (2) 寝屋親になって欲しいと頼まれた際の状況
- (3) 寝屋親になって欲しいと頼まれた際の心境
- (4) 寝屋親を引き受けたときの心境
- (5) 寝屋親になるにあたって心配だったこと
- (6) 印象に残っている寝屋子とのエピソード
- (7) 寝屋親になるにあたって、先輩に当たる寝屋子を手本にしたか
- (8) 寝屋子結成時期および解散時期

## 2. Mさんからみた寝屋子

(Mさんへの単独インタビューより)

プロフィール(2012年7月時点)

Mさん

寝屋親

年齢 30代前半

出身地 答志

寝屋子結成 1012年

寝屋子解散 継続中

Mさんの夫

年齢 30代後半

出身地 答志

### ●寝屋親になる以前の、寝屋子慣習に対しての印象

私の実家は寝屋子をしていたんです。といっても、おじいさん(祖父)が寝屋親で、寝屋子は旦那のお父さんの世代なんです。それで、偶然なんですけど、旦那のお父さんもうちで寝ていたんです。ですから、寝屋子を経験したわけではな

いですが、小さいうちから身近にはあったと思います。

お盆とかお正月になると、おじさんら、もうおじいさんになるくらい早くに寝屋子を降りてしまっているのに、みんなが集まって、言ったら、私のおじいさんの子供たちになるんですけど、お盆やと仏壇にお供えしてくれたりとかして、ずっとそういう繋がりがあって、なんかいったら、私のうち寝屋子してるんやとか、ちょっと自慢げな感じでした。

それから、私のおじいさんを、ずっと「お父さん」として来てくれている。おじいさんの子どもはうちのお父さんとおばさんだけやのに、他人、言ったら、血の繋がってないおじさんたちが、おじいさんをお父さんって呼んでるのは、すごい、自分としては自慢というか、そういうのはあります。

ただ、私としたら、正月に来てお年玉をくれるおじさんたちっていう感じなんですよ。だから、寝屋子っていうのは直接見た訳じゃないけど、寝屋子っていう制度はすごいええなっていう感じでしたね。

寝屋子という風習は男性が中心になっていると考えられるが、このMさんの、血のつながりがないにもかかわらず、寝屋子がMさんの祖父を「お父さん」と呼んでいることを自慢げに感じていたという証言から、答志出身の女性にとっても寝屋子が媒介する人と人の関わりは、ともすれば親戚と同等かそれ以上の影響をその人の人生観に及ぼしていると考えられる。

#### ●寝屋親になって欲しいと頼まれた際の情況

婦人会の皆と、子どもの運動会の踊りの練習をしていたときでした。旦那から私に電話が掛かってきたのは。

旦那が仕事から帰ってくるのを寝屋子の子供たちの父親たちが浜で待っていたらしいんですよ。それで、どうしようか、と、練習している私に電話が掛かってきたんです。私らの子どもは娘3人だから、今まで寝屋子のことは全然考えたいなかったんです。女の子だから、寝屋子に入れるわけでもないし。

だから、寝屋子を引き受けようかどうしようかと旦那から電話が掛かってきたときから、その時からずっとドキドキしてたんです。寝屋親を断るにしろ、断らないにしろ。

旦那の方は自分が寝屋子に携わってきたから、そこまでのことはなく、どういうものか解らないということもないので、どうしよう、寝屋親を受けようかと父にも相談したらしいです。

#### ●心境

調査時、Mさんは寝屋親になってまだ数ヶ月だったため、質問事項の(3)～(6)

がほとんど重なっている。

私は、「私になんかが寝屋親になったらいかんやろう」と思いました。私ではまだ若いというか、まだ未熟というか、自分らの子供たちを育てている身なので、他の子供たちまでよう育てるか。そこまで育てるわけではないけど、よう育てんかなって感じだったんですよ。

多分、私は不安だったんです。なんか、自分は、まだ若いって思ってたんで、その、お父さんやお母さんって呼ばれる？ 自分の子以外の子に呼ばれる程の、器も持っていないと思ってたし、一番最初はもう、不安でしたね。

最初は旦那に、それはいかんやろ、ほんとに、無理やと思うって言ったんですよ？ 旦那どう思っていたか解らないですけどね。女だから、寝屋子を経験していないからそういう風に思うんかも知れないし、寝屋子はどういうもんかっていうんも解らないし、男の子もおらんしで、なんで、もうとりあえず不安でした。

でも、もう決まったら決まったで不安プラスわくわく。わくわくですね。それまではもうほんと不安で。どうしよう、どうやってやったらええかもなんもわからんという状況ですから。そういう感じですね。

ほんとに、女から見たら、寝屋子はただ寝に来るだけなもんっていう感覚なんです。なんか、飲んで、家に帰らずに、帰れずに、寝屋子に来て酔い醒まして帰るみたいな、今までそういう感覚でしか見てなかったんです。多分奥が深いんでしょうけど、女の人には？ 私らには、寝屋子っていうもんはあんまり解らないですね。

一番最初はやっぱ不安で、はっきり言うと、断ったほうがええんじゃないの？ っていうのは感じました。「私にはようせん」って感じ。しっかりもしてないし、もっとしっかりして自分に自信があるっていうような人間やといいんですけどね。私はそこまで責任感がある人間でもないし、自分の子育てもこれが正解かどうか解らずにやってるんで、他のもっとおっきい兄ちゃんらをよう育てるかなっていうのももうほんとに不安でしたね。

それと、会話するにしても、共通点がないんで、何喋ってええんやろって、その子らが今なにに興味を持っとるのかも解らないし、予想もできないんで、女の子らやとまだ解りますけど、やっぱりいちばんは不安ですね。

寝屋子の子供らの親は私より上なんで、よけいに感じるんですよ。

最初の夜、最初の時は、ほんとに寝に来てくれるのかなとか、うちは布団持ってきてその日にもう、今日寝ていっても良いかなって感じで寝てった訳ですけど、ほんとに、今日で凝りてもうきやんかったらどうしようっていう、最初はそういう感じで、なんか、ここで、このうちの寝屋子でええんかなって、私らが親でええんかなって、もう、ひとつごとに不安を持ってて、え？ あの人らがお母さん？ お父さん？ とかって思っていないかなとか、もう、なにもかもに私は不安を持ってましたね。だからって言って、なんていうんでしょう、いったら、なめられた

らいかんでいうか、悪いことは悪いっていわないかんし、そういうのも持ちつつ、来るかなあって、ほんで、ここで寝てるときは寒ないかなあって、なにもかも心配をして、その日でもうきやんかったらどうしようとか、居心地もずっと考えてました。

子供らが来て、ここに来ることを楽しみにしてくれるように、最初はそういういろんなところに気使ったというか。うちの子全員女の子だったんで、この部屋もピンクの花柄のフリフリのカーテンやったんですけど、いくらなんでもいかんやろて全部換えて。

私はとりあえず不安だけでしたね。でも決まってから、もう、なんか、しっかりせなあって感じで、楽しみも出てきましたけど、それまでは、向こうのお父さんらからみても年下なんで、私やったら頼りない、そう会う毎に言っていたんですよ。ほんとに頼りない親やけど、よろしくお願いします。ほんとに頼りない親やけどって、もうずっと不安で、少しも寝やれやんかったんと違うかな、最初話が来たときは。どうしよ、大丈夫かなって。もう、決まればね、部屋空けやなっていう感じで片付けが始まったりとか、あれなんですけど、それまではほんとに不安やった。

そんなんでしたけど、一番最初の食事の時に、ごはんをいっぱい食べてくれるから、私に、子ども、自分の子どもやっていう感覚がちょっとわいたっていうか、なんか、一生懸命残さず食べようてしとるっていうの、解るんですよ。自分とこやとそんな食べやんのに、もう、一生懸命。これ全部食べられるかなっていう量やったんですよ？ お母さん、その子供らの親が一緒に来てお布団も置いて、で、そのお父さんやお母さんたちもおってもらって、ごはんちょっと食べてもらう予定やったんですけど、親たちは私らと子供らがもっと話をできるようにってことで、すぐにもう席を外して帰って行ったんですよ。やもんで、料理がすごいいっぱい残って、ほんで、「え、これ、食べてってよ、いっぱい残るやんか」って言うたんやけど、もう、帰ってもうて、ほったら、寝屋子たちはすごいいっぱい食べる、こんなに食べるの？ っていうくらい食べてくれて、すごい、母性本能やないけど、あ、男の子ってこんな食うんやって感じて。そしたら、ほんとに、いちばんその日に、なんか可愛いつて思ったんですよ。男の人らは解らないですけど、私からみると、自分の子らと違う可愛さがありますね。お父さんらから見てもたぶん、ごはんいっぱい食べたからって何も思わんでしょうけど、私らから見るとそういう感じですね。最初の不安が、それで吹き飛んだっていう感じですね。

Mさんの場合、「私なんかが寝屋親になって良いのか」「自分の子供を育てている段階でまだ未熟なのに」「会話での戸惑い」などといった不安な部分が、最初の食事の時まであったことがうかがえる。部屋を用意し、布団を持ってきてなお、「本当に寝に来てくれるのか」と不安だったのである。寝屋子を組む前は自

分自信の能力面で、寝屋子を組んでからは寝屋子たちが寝に来てくれるのかと、ずっと不安だったという。

しかし、その不安だった心境がたった一度の最初の食事で吹き飛んだと言うのだから、そのときに起こった変化は劇的なものである。明らかに普段以上の量を食べる姿を見て、実子に感じるものとは異なる「可愛さ」を感じたというのである。本人は「母性本能ではないが」と言っているが、これをきっかけにして、寝屋子に対する視線が変化したのではないかと考えられる。

実際、寝屋親になってからは、寝屋子を心配したり、寝屋子が来ることを楽しみにしている様子が次のように現れている。

例えば、運動会なんかでは、自分の子はもちろん応援しますけど、寝屋子は他の子よりは応援する。一緒に走るんやったら、うちの寝屋子を応援する。他の子よりは特別に見ているけど、でも、ほんとの子どもとしての扱いはしていない。家族程も近くない微妙な隙間があるんです。まだまだ入ったばかりの子なんで、私らには親密な話もしてくれないですけど、逆に親密な話をしやすいかもわからんね、恋愛とか、実際親に言いにくいことが言いやすいんも、隙間があるからかな。ただ、隙間があっても、他人やのに、寝屋子のこどもたちはかわいい。たまに寝に来るのはほんと可愛いんですよ。自分のうちの子どもは女の子ばかりで、男の子が寝るっていうのは初めての経験なんですけど、その子らはなんか特別可愛いですね。

うちは春休み、高校に上がる前は数日来てたんですけど、高校に入ってから、5人のうち4人野球部で、1人は陸上なんで、めったにこないです。島にも週一回来るかどうかなんです。高校入ってからはこないだ一回来たんですけど、それ以外はほとんど来てない。その五人がどういうふうな関わりなのか、それもまだ解らないし、誰と誰が特に仲がよくてとか、二人は一緒の高校に行ってるんですけど、残りの三人はばらばらで、四校に別々なんです。だから、休みに帰ってきてても、そのときによっている組も違う。ほんで、誰が特別仲が良いとかそんなん全然解らないし、数日しか来てない、それでも可愛いんですけどね。

その、ごはんを食べるとか、女の子と全然違うんで、そういうのはすごく新鮮で、「ああ、男の子ってこんなに食うんや」という新鮮さとかあります。

私の料理を減多に他の子供らに振る舞うってことはないんですけど、それを喜んで食べてくれたりとかするもんで、すごい喜びがある。

だから、部活があるとかって、高校に入ってから来たのは、こないだ一回だけなんですけど、それでも、ほんとは多分、家におる方が来遣わんでええのに来てくれるっていうのはすごい嬉しいですね。

うちの寝屋子は、来てもすごいきれいにして帰ってくれる。やっぱり、気を遣っているところがまだあるんでしょうけど、それがどうなるか、今後まだ解らないですけど、今のところ、きれいにして帰ってくれる。自分の家では多分こんな



ことしてないけやろうけど。

でも、寝屋子が寝る部屋はうちの子供らの子ども部屋だったんですよ。それが、寝屋子を置くってなって、一生懸命片付けて空けたんです。滅多にこないんですけど、それでも、子供らがいつ来てもいいように、誰も来なくても掃除をして、いつ来てもいいように待ってるって感じですね。

他には、寝屋子にいなかったら全然喋るとかしないような関係だと思うんですよ。ちょうど、微妙に私らの子どもよりも上やし、私らに年がもちろん近いわけでもないんで。私らと高校生が喋るっていう共通点がないんで。それが、路とかで、会ったときに「あ、今日はクラブどうやった」とか、「あ、今日は休みで帰ってきたのか」っていう、そういう会話は、多分寝屋子を置かなかったらなかったと思う。そういう面では、うちは女の子ばっかやで、女の子の友達とは喋っても、男の子とは特に共通点がないんで、寝屋子をおいたからこそそういう関わりができたっていうことはありますね。だから、娘らにとっても兄ちゃんはもちろんいいわけですけど、兄ちゃんができたんで、春休みはよく来てたんですけど「今日は来るかな」とか、「今日はなんできやんのやろうな」とか、兄ちゃんができたっていうんで子供らも喜んでもるような感じもありますね。私らもなんか、ほんもんじゃないけど、息子が出来たっていう、そういう喜びはありますが、特に気にはしてなかったですね。

Mさんはここで、「本物ではないが息子が出来たという喜びがあると」言っている。これこそが、Mさんと寝屋子の関係を如実に語っている部分であろう。つまり、Mさんは、血縁がないにもかかわらず、寝屋子をまるで息子のようにみているのである。

さらにMさんは、寝屋子を通して関係が深まっていく過程を次のように推察している。

多分私の考えでは、島で行事をこなしていく毎に絆が深まるっていう気がするんですよ。で、行事ごとに、寝屋子っていうので、自分らで、組が一緒に手伝ったりとか、先輩から聞いてそれを真似したりして、どんどん点と点が繋がっていくと思うので、結構行事毎に帰ってくるので、行事をこなす毎にだんだん繋がっていくかなっていう感じがしますね。休みでも部活があるんであんまりこないんですけど、行事やったら完璧に休みで、お盆とかで多分来ると思うんで、それを過ぎてくるとどういう風になるか？ もっと「あ、こういうこらやったんやな」っていうのが判ると思うんですけど、まだそこまで多分心を開いてないからか、遠慮しとる。こちらも気使っとるし、向こうも多分遠慮してる。部屋をきれいにしていってというのはそういうのがあると思うんですよ。ひとつ上は、夏休みが過ぎたら、すごい汚くして帰って行ったっていうてんで、お盆もあるし、天皇

祭っていうお祭りが十四日にあるんですけど、その行事が過ぎて、その子らがどういう風になるのかなっていうのはありますね。

ほんとは、子供らもほんとの兄弟ではないですけど兄弟感覚みたいな感じで、遊んでもらったりとかする風になるんですけど、まだなかなか兄ちゃんらと関わらないんです。子供らも多分、兄ちゃんらが来て、どうしたらいいか解らんっていう、私と一緒に状況やもんで、やっぱり、生活一緒にして行ってだんだん解ってくるのかな。

かつては夜ごと集まっていた寝屋子も、現在ではそれほど集まらなくなっている。結成数ヶ月経ったMさんの寝屋子も、寝屋子たちは皆島外の高校に進学したため、高校に入学した後はほとんど集まっていなかった。Mさんは寝屋子を組んでから始めて訪れる夏休みでどれほど変化が起きるのかを楽しみにしているようであった。

また、Mさんは、寝屋子たちが寝に来ることを楽しみにしているようである。寝屋子を組んでしばらくは春休み中だったため、時折寝に来ていたという。

寝屋子を取った今は、もう不安とかはなく、あるのは、いつ来るかなあという楽しみですね。休みやから、今日はもう来るかなあとか、野球やってるんで、土日の雨の日やと来るかなあとか、そういう感じで、もう楽しみになってますね。

だからといって、特に一緒に過ごしてるわけでもなく、子供らは子供らで、久しぶりにあった同級生と喋ってるんですよ。そういう風に喋ってるんですけど、来てくれるとなんか安心するっていうか。やっぱり、嫌なとこやと来ないじゃないですか。それで、私らもなんも言わんし、ここの方が集まりやすくて来てるんでしょう。家にいるよりここにみんなと集まれるのかなっていう勝手な考えですけど、来てくれるとすごい嬉しい。だからもう、不安とかはなくなって、いつ来るのかなっていう楽しみの方が大きくなりますね。

でも、いつ来るかわからないんで、来ないっていう感覚で、ここに洗濯物を干しまくっていたら、久しぶりに来たよというんで、大慌てで洗濯物を片付けたこともありました。それからはもう洗濯物をここに干さなくなったんですよ。子供らがいるんでこの一部屋ずっと空けてるのって、もったいないというか、大変なんですよ。一部屋空で空けないって大変なんですけど、それでもいつ来るかなって待って生活してます。

それと、伊勢とかに行くと、その子供らの、それぞれ高校がいろいろ違うんですけど、その近くを通ったときに、どうしとるかな、ていう感じの、なんか、自分の子とは違う親心が出てきたかなっていう感じですね。

自分たちの子ども程も心配はしてないですけど、同じように心配はするんですよ。すごい暑くなってきたんで、野球しとるのに、熱中症とかになっていかん

かな、とか、全然頻繁に会ってないのに、そういうのを思ったりとかします。

自分たちの子はやっぱり私たちが全部手を掛けていかなきゃいけないんですけど、寝屋子のこどもたちはもう、お母さんたちが実際いて、他の世話は全部してもらって、そのうえで、来たときについていう感じの、そういう気楽さがありますね。

Mさんは、寝屋子たちが寝に来ることを楽しみにし、離れて暮らす寝屋子たちを心配している。しかし一方で、実子とを育てるのは別の気楽さがあると言う。この、両立する楽しみと気楽さこそが、女性の寝屋親を寝屋子の関係構築を円滑に開始、進行させる、重要な要素となっているのではないだろうか。

そして、関係の構築が円滑に進むからこそ、気持ちは次の段階へと進むのであろう。

まだ数日しか寝に来ていないんで、こうはこうやって、ここはこんなことせないかんっていうことを教えたりもしてないですけど、自分たちの子どもを育てるプレッシャーとまた違う、逆に人の子を預かるっていう、そういうプレッシャーはちょっとですけどありますね。だから、他の寝屋子の、こんなときどうしたかっていうの聞いたり、いろいろ話を聞くと、すごい口うるさい寝屋親もいれば、もう、来てもほっといてある、うちも結構ほっときますけど、あんまりいわない寝屋親もいるし、でも、どれが正解なんかっていうのは解らない。だから、今はまだ探ってるって状況ですね。他にも、子供たちがそれぞれどういう性格かっていうのも、まだこのちょっとの間しか付き合っていないし、話いっぱいして一緒に生活してるわけでもないんで、まだ解らないです。それが解ってきたら、もっとこう、気楽に、もっと近い親子関係が築けると思うんです。やっぱり、寝屋子と違って、自分たちの子どもは大分近いですよ。

まだ遠慮がある分、そこまで親子っていう関係ではないですけど、だからって不安はないですね。でも、まだ「お父さん」「お母さん」って呼ばれてもないんで、そう呼ばれる段階に、いつなるんやろなっていうのは楽しみです。

多分、恥ずかしくて言えないっていうのもあると思うんですよ。それと、自分の親よりちょっと下やっていうのがあるんで、多分、今までは誰々んちのお母さんって感じで見てたんで、自分のお母さんとは呼べないんでしょうね。多分恥ずかしさがあるから呼びにくい、そういう感じはしますね。だから誰が一番最初に私をお母さんと呼ぶのか楽しみです。

ここで注目すべきは、今はまだ遠慮があり、寝屋子たちのこともよく解らないが、それが解ってきたら、もっと近い親子関係を築くことができるのではという部分。そして、「お父さん」「お母さん」と呼ばれることを楽しみにしていると

言うところである。これは、Mさんは寝屋子と家族のような関係を構築しようとしていると考えてられるのではないか。

寝屋子たちとの間に家族的な関係の構築を期待しているようなMさんであるが、寝屋子慣習との付き合いは“肩の力を抜いた”関係であった。

他の寝屋子よりあそこの寝屋子ってええなって言われるような寝屋子にしようっていうのは思うし。子どもらもちろん、ここの寝屋子やって、恥ずかしくないような寝屋子に、自分らの自慢の寝屋子になるようにしたいなと思ってるんですけど、それがどういうものかっていうのは、はっきり私には解らない。ええ寝屋子やって言われるようにはしたいですけど、特別こういう風なっていう考えはないです。

まだ多分、寝屋子っていうのがどういうものかが解らない。だから、私としては、寝屋子っていう制度に関わらせてもらえたことが嬉しいんです。私もよく知ってるわけではないんで、関わって、今から知っていく、そういう段階なんです。多分、一緒に勉強っていうか一緒に生活して、いろいろ覚えていって、子供らのことわかって。で、いろいろ、こういうときはこうしたらいいよって、人生の先輩ではありますけど、寝屋子はほんとに一緒に始まったという感じなんです。

そういう感じで、まだ全然ほんとの、私らが想像しとる寝屋親と寝屋子の関係まではいってないかな。うちの寝屋子も、私らの実家のおじさんらみたいになるんかなあって、でも、まだそれが想像できないっていう状況ですね。男の子がどうなのか、そういうのもようわからん。だからもう、ほんとに、旦那の横におるだけの状態です。まだ、寝屋子、寝屋親一年生はそんな感じです。

寝屋子という慣習がどのようなものなのか、中学校を卒業したばかりの男子とはどういうものなのか、寝屋親として寝屋子とどう付き合えばいいのか、そういったことがよく解らないから夫の側にいるだけだというMさんだが、一方では、他の寝屋子よりいい寝屋子だといわれるような寝屋子にしたい、自分たちが自慢できる寝屋子にしたいという目標も掲げている。そのうえで、寝屋親を始めたばかりだから、寝屋子と共に成長していく生活が始まったのだと語っている。

### 3. Jさんにかみちた寝屋子

(Jさんと夫2人同時のインタビューより)

プロフィール(2013 年 10 月時点)

J さん

寝屋親

年齢 40 代前半

出身地 伊賀

寝屋子結成 1997 年

寝屋子解散 2009 年

J さんの夫

年齢 40 代前半

出身地 答志

#### ●寝屋親になる以前の、寝屋子慣習に対しての印象

寝屋子というより、答志島を知らなかったです。

付き合いだして、結婚してから一年間は伊賀の方に住んでたもんで、結婚式とかで寝屋親が仲人してくれたりとか、そういうのでぼちぼち多分話は聞いてたと思うけど、そこまで覚えてない。結婚するっていう報告もやっぱり、自分の親と、寝屋子の親との、二つ報告に行くのとかもあったんで、ぼちぼちは聞いてたんやろうけど、その当時っちゅうのはあんまり覚えてないな。

最初はやっぱり聞いたとき寝屋子とかゆうのは信じられやせんかった。ひとの家に布団置いてたり、そこへ泊まんに行ったりとか。私らの家もはっきり言ったら田舎やもんで、ここらと一緒に、近所とかでも結構みんな仲ええことしとったりするのはあるけど、またここらはまた独特やし、そういう寝屋子の話聞いても、最初嫁に来てここに住んでも、まさか自分らが寝屋親になるとは思ってないから所詮他人事やったけどな。

J さんは夫と結婚して一年は夫と共に伊賀で生活していたが、夫が漁師をやりたいということで答志に移住することになったという。結婚の段階ですでに、寝屋子慣習に幾分触れてはいたのだろうが、寝屋子慣習に深く関わることになることは予想していなかったという。また、寝屋子慣習に対する印象や、始めて触れたであろう慣習への感情などが余り印象に残っていないのは、この後寝屋子慣習に深く関わったためであると考えられる。

#### ●寝屋親になって欲しいと頼まれた際の状況

これは J さんの夫による証言を元に解説する。

頼まれたときは、まだ子供のない俺ら夫婦だけやった。俺弟やもんで兄貴がおるんやけど、兄貴や本家の親父らを、寝屋子の子どもの親が先に説得してあったもんで、ほぼ強制みたいな感じっちゃうか、もう周りから返事を固められてたもんでさ、断るに断れへんかったんやけど、それでも2回か3回は断ったんやけどな。

俺もまだ寝屋子入っとんの寝屋子の親父になるっちゅうんはちょっとおかしいで、ちょっと他当たってくれってゆうて、2, 3回断って他探してもらったんやけど、それらしいところがないもんで、ってゆうてまた頼みに来たんや。

でも俺だけで寝屋子できる訳やないから、嫁さんにゆうて、はっきりゆってもうほぼ、嫁さんらの付き合い、嫁さんらが付き合いしとるもんでさ、ほやで、嫁さんが返事したで、取ったてゆういきさつやな。俺も他の寝屋子に入っとんの寝屋子の親父もしとったちゅう、なんか、変な、答志でも絶対ないような異例な寝屋子やったんやけどな。

もうほやで、「どうする？」しか言いようがないやん。えらいよ？ とはゆうたよ？ えらいけどどうするちゅうた。初め2, 3回は俺が断っとったんやけど、多分4回目ぐらいで俺引き受けたんかな。また頼みに来るってゆうけど、どうする？ っちゅうて嫁さんに訊いて、嫁さんは、「あんたがもう、受けよって思うんやったら受けやええやん」って。でもほやけど、「おまえが付き合いえらいよ」って、そこまでゆってたけど、あんまり考えて無かったな、こんなえらいとは思わへんかったやろしな。ほんたら、まあ、ええてゆうたで、「ほったらまあ、引き受けさしてもらわ」ってゆうて引き受けたんや。まあ、そのとき引き受けやんかったら、その年代の子どもら引き受けやんかっても、またゆうてくるかなとは思たでな、その下もゆうとったで。まあ、早かれ遅かれてゆうとこやん。

Jさんの寝屋子の場合、Jさん夫婦に寝屋親を打診する前の段階で、すでにJさんの夫実父や兄に、Jさん夫婦に寝屋親を頼むことを話し、それを承諾されていたという状況だったのである。いわゆる、気が付いたら外堀が埋められていたと言う状況なのである。

さらに、次の世代の寝屋子も寝屋親を捜しているという状況も重なり、遅かれ早かれ寝屋親の依頼が回ってきただろうと、Jさんの夫は推測している。

また、Jさんに対してしきりに、寝屋親を引き受けると大変だと言っている。寝屋子慣習の性質をみてるに、島外から移住した者にとって、寝屋親という役割は決して楽なものではないだろう。実際、Jさんは寝屋子と関わる中で、ともすれば踵を返したくもあろう事態に遭遇している。その詳細は後ほど取り上げることにして、ほとんど忘却の彼方にある「心境」をみてることにする。

## ●心境

いろいろな人から寝屋親のこととか、自分らが寝屋親するってなったときに、他の人からも聞いたりとかしたときに、自分らがそれだけのことをやってる、やれんのかなっていうのがあったな。

でも、寝屋子取ったのはいいけど、高校入った時点で8人最初居ったんやけど、全員が居らへんかった。高校の時はもう全員が下宿とか、他のところ行ってしもて、答志には誰もいなかったもんで、ほとんど寝屋子取ったっていう感じはしやんかったかなっていう、最初はそんな感じかな。

寝屋親っていうのも、その寝屋子の子どもらの親らが家に頼みに来て、言うのも旦那の方にゆうから、自分はなにもそんなに深く考えてなかったし、受けたときも、寝屋子っていうこと自体、寝屋親っていうのをまだはっきりわかってなかった。実際、どういうことしていくのかっていうのも、わかってなかったもんで、周りから言われて引き受けたっていう感じやけども、そんなに深く考えてはなかったと思う。

ただ、うちは、寝屋子自体取るのが早すぎた。旦那が若すぎたんで、大体この2、3年ぐらい前からようやく旦那らの年代の人らが寝屋子を取り始めたぐらいにはもう寝屋子が終わってる状態やもんで、家らはちょっと特別で、早すぎたのかなてね、ほやで、私らも記憶が、大昔のことやもんで忘れてるてゆうのはあると思う。でも、若かったから引き受けられたっちゅうんもあるな。今やったら絶対よう引き受けん。

Jさん夫婦は20代になったばかりの頃に寝屋親を引き受けたのであったが、答志でもここまで早く寝屋親になる例は異例であったという。また、時期的には答志に移住してすぐに寝屋親になったのであるが、答志での生活になれる前であったことも、寝屋親を引き受けることができた要因であるとも考えることもできるのではないだろうか。次に出てくる一幕はJさんが寝屋子慣習によって生成された人間関係に翻弄される事例であるが、それを見る前だから寝屋親を引き受けることができたのではないかと考えられなくもない。

#### ●寝屋子慣習が織りなす人間関係のある一幕

いちばん大変やったんは寝屋子の子らの家の付き合いやな。今ではもうそうでもないんやけど、葬式とかいろあると、昔はみんなが寄って、お昼食べてもらうのとか全部作ったりとかしてたもんで、そこへ寝屋親として行くんやけど、誰が親戚の人らっていうんもわからへんやん、その人の親らは知ってるけど、その家がどんな付き合いしてるかっていうのは知らないじゃないですか、特に、私は他所から来てるもんで、そういう親戚付あいつちゅうのがわからへん。

だから、そこへ行っても、そこのおばさんらがみんな「あの子はなんや、なんで来とんな」ってゆう。自分は寝屋親やでいかなって思うんやけど、親戚の人

らから見たら、「なんや、どんな関係や」ていうて、やっぱり、ぼそぼそといわれてるのはあって、それでも答志の子ら、地元の子らやとみんな知ってるもんで、話しかけてすればええんやけど、他所から来た私らやと、そんなよう知ってる人らおらへんとなると独りでぼつんとおらないかんとか、昔っていうんか、前はそういうのはちょっと嫌なときはあったな。

今はもう、そういうんもないもんでいいけど、寝屋子はそこだけの付き合いじゃなくて、親とかの付き合いとか、祝い事、不幸事とか全部関わって来るもんでな。

だから、祝いやから、祝いのお金とか持って行ったりしやないかんしていうのも、いろいろ人から情報仕入れていかないかんし、その寝屋子の、寝屋子の子らの家のことっていうのはわからへんもんで、答志に親戚の子が一人居るもんで、その親に、寝屋子の子のことでなんかあったら教えててゆうて、頼んであるんやけど、それでも最初はなかなか難しかった。

ここでは、寝屋子慣習によって生成される関係は、寝屋親と寝屋子、寝屋子同士という関係だけではなく、寝屋親は寝屋子を通して、寝屋子の生家とも関係を持つことになるということが鮮明に現れている。寝屋子を媒介とした人間関係の中で、Jさんは疎外感を感じながらも、周囲の手を借りて積極的に関わっていった。その結果、現在では疎外感を感じることは無くなっているという。この関係は、文章にすると少々わかりにくくなるが、親族関係にみられるものとほぼ同じではないだろうか。

答志の外から移住してきたJさんにとって、寝屋親を引き受けることで半ば強制的に取り込まれたこの親族関係のような関係は、答志で人間関係を構築していく過程で少なくない恩恵を与えたという一面も内包しているのではないだろうか。



Mさんは、寝屋子は家族ではないというが、その一方で、結成して間のない寝屋子たちに対して、「かわいい」と感じているという。他にも、運動会などで応援するし、野球部に入っている寝屋子が熱中症になっていないかと心配していたりと、身内に近い視線で接していることがうかがえる。そして、きわめつけが、寝屋子に、「お父さん、お母さん」と呼んでもらえることを期待し、楽しみにしているのである。また、まだ寝屋子を組んで間がないが、これから答志の行事をこなす毎に絆が深まるだろうとして、より深い関係になろうとしていることは明らかであろう。そこには、寝屋子との精神的な関係の構築、いわゆる、愛情を根底とした関係の構築を期待しているのではないだろうか

Jさんの場合、特に注目される点は、寝屋子の生家での葬儀の際に、場に馴染めていとはいえない疎外感を感じつつも、積極的に寝屋子慣習が生成している人間関係に入り込もうとしているというところである。この現代において、そこまで深い人間関係に入り込むことは必ずしも必須ではないということもできようが、Jさんは積極的に入ろうとしているのである。ここにみられる、寝屋子慣習において形成される人間関係は、農村地域などではごく一般的にみられる親族関係に近い関係であろう。そしてその維持は、関係をより強固なものにしよう。

これら2人の女性の証言を鑑みると、たとえ先行研究において「寝屋子は家族のようなもの」とされていなくとも、現状、寝屋子慣習において生成されている人間関係、特に、寝屋子－寝屋親関係は家族形態のひとつであるといっても過言ではない。

- [1] 新川泰弘・島崎良, 2009, 「答志島の寝屋子制度と子育て支援環境ー子育てサロン利用者へのインタビュー調査を通してー」, 『三重中京大学地域社会研究所報』21, pp.127-137
- [2] 伊藤ひとみ, 「“支えあいが息づく” 答志島 寝屋子朋輩の島」, 『女性自身』, No.1986, pp.59-66
- [3] 川又俊則, 2012, 「答志の寝屋制度と「放課後」」, 鈴鹿短期大学 生活コミュニケーション学研究所年報, 『生活コミュニケーション学』3, 別冊
- [4] 広報とば, 1999, 「特集 寝屋子物語 寝屋子は夜8時を過ぎると輝きを増す」, 『広報とば』, No.975, pp.1-9
- [5] 松竹維, 2012, 「答志島の「寝屋子制度」」, 『伊勢新聞』, 7月29日, p.6
- [6] 松浦勲・大村恵子, 2002, 「日本最後の若者宿ー鳥羽市答志の寝屋子の研究」, 『九州工業大学研究報告(人文・社会科学)』51, pp.39-97
- [7] 宮前耕史, 1999, 「現代における宿親ー宿子関係ー鳥羽市答志の寝宿慣行を事例としてー」, 『史境』38・39, pp.92-101
- [8] 宮前耕史, 2001, 「寝宿における人間関係と「古い」答志町答志の事例から」, 『国立歴史民俗博物館研究報告』91, 国立歴史民俗博物館, pp.379-383
- [9] 宮前耕史, 2002, 「「寝屋制度」の誕生・序説ー「寝屋制度について〈寝屋親会議の記録〉ー答志」より」, 『日本文化研究』13, pp.69-92
- [10] 宮前耕史, 2003, 「「寝宿制度」の誕生ー鳥羽市答志の寝宿慣行をめぐる「民族再帰的状况」の成立ー」, 『日本文化研究』14, pp.19-51
- [11] 宮前耕史, 2004, 「「寝屋制度」の「現在」記述のための覚え書きー答志島・答志の寝宿慣行をめぐる「民族再帰的状况」によせてー」, 『日本文化研究』15, pp.43-81
- [12] 宮前耕史, 2005, 「民族に関する言説の内面化ー答志島・答志の寝宿慣行をめぐる「民族再帰的状况」と言説としての「寝宿制度」ー」, 『日本文化研究』16, pp.17-56
- [13] 宮前耕史, 2006, 「マス・メディアにおける答志島・答志の寝宿慣行に関する理解の特徴ー新聞・雑誌記事を中心とした検討からー」, 『歴史人類』34, pp.94-124
- [14] 山岡健, 1995, 「若者組「三重県鳥羽市坂手島・答志島・神島」」, 『大阪教育大学教育研究所報』30, pp.1-9
- [15] 横浜勇樹・上野利三, 2009, 「三重県鳥羽市の「寝屋子」にみる持続可能なコミュニティ形成に関する研究」, 『三重中京大学地域社会研究所報』, 21, pp.107-125